

お家の周りの足元に ～身近に生きる植物の紹介～

長谷川匡弘

この記事を書いている4月下旬、新型コロナウイルス感染症拡大防止のために、全国に緊急事態宣言が出され、不要不急の外出は控えなければならなくなっています。自然が生き生きと変化していく5月。いつもの年であれば、季節の移ろいを感じたり、身近な自然と触れ合ったりするにはとても良い季節です。しかし、博物館も休館、そして行事の取りやめが続き、私たち学芸員も皆さんといっしょに自然を楽しみ、学ぶことが難しい状況にあります。そんな中ではありますが、少しでも皆さんのまわりにいる、季節とともに変わっていく生き物のことを伝えたいと思い、この記事を書いています。

植物は、一步でも家の外に出れば、庭の片隅でも、舗装道路の隙間でも元気に育っている、一番身近にいて、見つけやすい存在でしょう。家の周りを散歩するとき、スーパーまでの買い物の途中の道端で、



図1上：ハルジオンの頭花。下：ヒメジョオンの頭花。ハルジオンの方が、舌状花が細くて不揃い。

気づいていないだけで、足元では静かに花が咲き、実ができ、次の世代が生まれてきています。ここでは、関西地方で家の周りなど、ごく身近で見られる植物たちを紹介したいと思います。友の会の皆さんは、よく知っている、もしくは見たことあるなあ、というものがほとんどだと思いますが、こうして紹介しようと写真を撮っていると改めて美しさや面白さに気づかされます。今は、あちこち出かけることや、じっくりと観察することはできないですが、必要な外出の際には、足元で植物たちが元気に育っていることを少しだけ、思い出していただければと思います。

ハルジオンとヒメジョオン（図1）

どちらも空き地、道端で見られるごく普通のキク科の植物で、いずれも北アメリカ原産の外来植物です。どちらもよく似ているのですが、ハルジオンのほうが少し早く咲きはじめます。この他、ハルジオンは蕾が下を向く、葉が茎を抱くように付くという違いがよく言われますが、ヒメジョオンも、しばしば蕾が下を向きますし、葉が茎を抱くようにみえる個体もあります。頭花（キク科は複数の花が集まって一つの花のように見えています。この花の集まりを頭花といいます）の大きさはハルジオンの方が一般に大きく、舌状花（花びらに見える部分。実は一枚一枚が一つの花。）の先がうっすらとピンクに染まっており大変美しいのですが、最近、ヒメジョオ



図2：道路沿いによく見られるハマツメクサ。

ンも大きな頭花で舌状花が薄い紫色をしたものをよく見かけます。つまり、この2種は結構見分けるのが難しいのです。図1を見ると、舌状花がハルジオンの方がより細く、やや上や下を向くものもあるなど不ぞろいです。ヒメジョオンは舌状花の幅が少し広く、どれもほぼ水平に出てそろっています。あと、ハルジオンは茎の中心に空間があり、茎を強めにつまむと、ぺしゃっとつぶれてしまいますが、ヒメジョオンの茎は中身が詰まっています。この特徴は今のところ例外がないように思います。

ハマツメクサ (図2)

大阪では道路の隙間に、必ずと言っていいほど見かけるナデシコ科の植物です。5月になると、花は咲き終わって果実をつけていますが、ハマツメクサは同じ属のツメクサとの区別が難しく、種子の形を見て判断します。ですから、5月はこの仲間を調べるにはよい季節なのです。兵庫県立人と自然の博物館の藤井俊夫さんが中心になって、道路沿いに育っているこの仲間の情報を集めたことがありましたが、舗装道路沿いで見つかるものは、ほとんどがハマツメクサでした。市街地では、ツメクサは水田や、土壌が豊かな場所に限って見られます。形の似た近縁種(例えばイトツメクサなど)があり、見分けるのは難しいですが、道路沿いで見つかる図2のように葉が太いものは、ハマツメクサであることが多いです。

アメリカフウロ (図3)

名前の通り、北アメリカ原産の外来植物です。アメリカフウロも道路沿いで、ごく普通に見かける植物です。とてもきれいに紅葉し、冬から春にかけて



図3：アメリカフウロ。右下は花。

は、道に落ちてるように見える真っ赤な葉で気づく方も多いかもしれません。花は、4月から6月にかけて開花しますが小さく、しゃがんでみないと気付かないかもしれません。よく見てみると薄いピンク色でとてもきれいです。私は花とそれを訪れる動物の関わりについて研究しており、どんな花でも、いいなあ、きれいだなあ、と思うのですが、アメリカフウロはどちらかという、きれいに紅葉する葉の方が好きです。

チチコグサモドキとセイタカハハコグサ (図4)

いずれもキク科の植物です。この仲間は見分けるのが難しいのですが、道端や空き地で普通に見かけます。ここでは、市街地で特によく見かける2種を紹介しましょう。チチコグサモドキは大正時代に日本に入ったと考えられている外来植物です。戦後に急速に分布を拡大したようで、現在では道路沿い、空き地、公園などで普通に見かけます。茎上部の葉の腋に、頭花がいくつか集まって付きます。セイタカハハコグサは、春の七草の一つのハハコグサと同じ属の、やはり外来植物です。チチコグサモドキとは、同じ属として扱われることもあります。花の付き方はチチコグサモドキとは違って、上部で茎が枝分かかれし、その先端に頭花の集まりが付きまします。セイタカハハコグサは、特に都市部で急速に分布を拡大しているように思います。

空き地に散らばる黄色い点々 (図5、6)

4月から5月にかけて、空き地に黄色い点のような花が広がっているのを見かけたことはありません



図4左：チチコグサモドキ。右：セイタカハハコグサ。その他、ウラジロチチコグサもよく見かける。

か? コメツブツメクサ (図5) のことが多いと思いますが、コメツブウマゴヤシ (図6) もよく見かけます (大阪で見かけるのは、腺毛が多いネバリコメツブウマゴヤシという変種が多い)。どちらもマメ科の外来植物で、遠くから見るとよく似ているのですが、属も異なる赤の他人です。特に果実を見ると



図5: コメツブツメクサ。上: 開花期のコメツブツメクサ。下左: 花序、下右: 果序。

形が違っているのがわかると思います。コメツブツメクサの方が、少し先に咲き始め、より花の密度が高く、ちょっと豪華に(?) 見えます。慣れてくると、遠くから見てもどちらなのかわかるようになります。

<はせがわ まさひろ: 博物館学芸員>

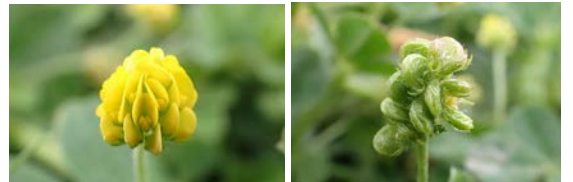


図6: コメツブウマゴヤシ。上: 開花期のコメツブウマゴヤシ。下左: 花序、下右: 果序。